

氏名・（本籍地） 春 近 敬（埼玉県）
 学位の種類 博士（文学）
 学位記の番号 甲第77号
 学位授与の日付 平成23年3月15日
 学位論文題目 近代の仏陀観に関する一研究—二〇世紀初頭のドイツと日本を中心として—
 論文審査委員 主査 司馬 春 英
 副査 藤 原 聖 子
 副査 村 上 興 匡

春 近 敬 氏 学位請求論文審査報告書

「近代の仏陀観に関する一研究—二〇世紀初頭のドイツと日本を中心として—」

論文の内容の要旨

本論文の目的は、20世紀初頭のドイツと日本における仏陀観と仏教理解を示す諸事例を採り上げ、それを通じてこの時代に特徴的な宗教意識を明らかにすることにある。19世紀後半から20世紀初頭にかけて、いわば「作り出された」仏陀観や仏教理解は、現代の視点からすれば、一面的であり、誤解であるとされるものも少なくない。しかし、そのような仏陀観には、それを生み出した宗教的要求が背景として存在するのであり、むしろ、そういった仏陀観を通して、その時代の宗教意識を鮮明に浮かび上がらせることが可能となるのである。したがって、本論文では、仏教理解という営為を、その時代社会が生み出した一つの表現行動として捉え、学術的・論理的に妥当であったか否かではなく、人々がなぜ仏教をそのように読まなければならなかったのか、人々をしてその解釈に導いたものは何であったのか、という視点から検討を試みる。

このような課題に向かって、第1章ではヘルマン・ベックの釈迦理解を主題として採り上げ、その特徴を、人智学運動と結び付いた彼の宗教運動との関連で明らかにする。その際にまず、ベックとは対極的な視座からの仏教理解を示していたオルデンベルクとの対比から、ベックの特徴を浮き彫りにする。オルデンベルクは徹底した文献学的方法に依拠した南伝仏典研究に基づき、仏教の教理は合理的な哲学であって、仏陀の人格性は仏教の本質ではないとする。それに対してベックは、「秘教の解放者」にして救済者である仏陀の特別な人格力を重視し、仏教は哲学的教理ではなく、瞑想によって超感覚的な領域に沈潜することこそがその本

義であり、北伝仏典の神話性と秘教性にその本質が窺われるとする。論者は、こうしたベックの仏陀観に、当時の文化批判的な精神運動に与する人智学の影響を見、ベックが主著『仏教』（1916）執筆以前にシュタイナーと出会い、人智学協会設立（1913）にも参画していることを挙げて、彼の仏教理解そのものが人智学の世界観に基づいていたことを論証する。論者によれば、オルデンベルクとベックの対極的な仏教理解は、前世紀転換期ドイツの精神的相克の縮図である。つまり、一方で経済的技術的發展と相俟った「脱教会」と合理的思考という社会潮流が生まれるとともに、他方で急激な近代化による社会の疲弊から、西欧の危機が叫ばれ、エソテリズムにその救済の道を求める潮流が起こっていたのであり、両者の対極的な仏陀観は、それぞれの潮流の端的な表現と見做し得るものである。

第2章では、ハンス・ハースの阿弥陀仏理解を主題とし、併せてその近代真宗教学における恩寵主義との関連について考察する。普及福音新教伝道会牧師として来日したハースは、英国福音宣布教会宣教師として来日したロイドとともに、当時的大乗非仏説論を踏まえた仏耶一元論に立ちつつ、独自の阿弥陀仏理解を提示した。彼は仏教を一旦キリスト教の立場から否定した上で、浄土教を仏教から切り離し、その中にキリスト教の要素を見出すとともに、阿弥陀仏はキリスト教の神観念が仏教に流入した歴史的生成体であり、両者の通低性は史的批判的方法によって解明し得るとした。ここに、ハースはロイド程には景教影響説に与しなかったにせよ、ハースの阿弥陀仏理解は、19世紀後半から20世紀初頭にかけての宗教史学派の立場を踏まえ

て提唱されたものであるとの論者の見解が示される。当時ハースやロイドによって着目されたのが、真宗学者の多田鼎であった。論者は、同じく清沢門下で恩寵主義を唱えた暁烏敏との対比の中で、多田のみが注目された理由を、暁烏に対して多田の恩寵主義が自らの罪悪性の自覚に立つ倫理性を強く保持していた点で、一神教的神観念により馴染み易かったことに見出している。論者は、ハースの親鸞「正信偈」の独訳を、後に出たシュタイネックの翻訳と対照する中で、ハースの翻訳がいかにもルター訳聖書を意識し、それに倣った翻訳であるかを考証し、それを以て、上に述べたハースの立場を立証するための傍証としている。

第3章では、上述のハースやベックの仏陀観ないし仏教理解が、現代的視点からすれば、いかに荒唐無稽に映るにせよ、前世紀転換期のドイツにおける精神史的情况に照合して捉え直すことにより、それらが宗教思潮の上で必然性を担って立ち現れたものであることを浮き彫りにする。当時ドイツでは、急激な近代化に伴う脱教会化と私的キリスト教への移行が進展する中で、一方でアカデミズムにおける実証的文獻学と史的批判的方法の徹底化が推進されるとともに、他方では、特に第一次大戦前後の時代の危機感を反映して、ニッパダイが「流浪する宗教性」と名付けた現象が教養市民層を中心に広がり、非合理主義と救済論の時代を招来していた。論者は、ハースが依拠した宗教史学派の立場を前者との関連で考察するとともに、彼の阿弥陀仏理解には後者の救済論が反映していることを確認し、また、文献学者でありながら人智学に身を挺したベックの立場に、両者に引き裂かれた「二重のドイツ的立場」の典型例を見出すのである。二人の仏陀観は確かに「作り出された」ものではあるが、それをある時代社会が生み出した表現行動として捉え直すことにより、かえってその時代の宗教意識を闡明する上で貴重な意味を担っていることが明らかになる。

審査結果の要旨

本論文は、従来の研究では採り上げられることの少なかったヘルマン・ベックとハンス・ハースの宗教活動および学問的業績に光を当て、彼らの仏陀観と仏教理解を、19世紀末から20世紀初頭におけるドイツの宗教思潮を背景として読み解いた点で独自の意義を持つ。

ベックの『仏教』は、日本では渡辺照宏の翻訳を通じて広く知られてはいた。しかし、そこに描かれる仏陀観にシュタイナーの人智学の影響が見られることは気付かれてはいたにしても、ベックと人智学との詳細

な影響関係を洗い出す研究は、これまで十分に為されてきたとは言い難い。『仏教』は文献学者ベックの著作であり、人智学への挺身はそれ以後の問題とする通念が支配的だったからであろう。年代確定と当時の宗教思潮の中でベックが占めた思想的位置を考察することにより、『仏教』そのものが人智学的世界観に基づいて執筆されたものであることを明らかにした点は、本論の功績の一つである。

また、ハースの浄土教理解および阿弥陀仏観に関する研究も、従来ほとんど顧みられることはなく、等閑に付されていたと言ってもよいであろう。彼が依拠していた仏耶一元論がその後の時代から見れば荒唐無稽な仮説に過ぎなかった点も、その一因であろう。しかし、阿弥陀仏はキリスト教の神観念が仏教に流入した歴史的生成体であり、両者の通低性は史的批判的方法によって解明し得るとしたハースの見解も、当時の大乘非仏説論、彼自身の来日目的、それに彼の依拠した宗教研究方法論の動向等を顧慮すれば、精神史的事例として十分理解可能となるのであり、このことをハースによる浄土教文献の独訳の特徴を探ることを通じて丁寧に立論している点に、本論の意義を見出すことができる。さらに、論者は、ハースの親鸞「正信偈」の独訳を、後に出たシュタイネックの翻訳と対照しつつ、ハースの翻訳がいかにもルター訳聖書を意識したものであるかを確認しているが、その過程で、ハースの独訳がロイドの英訳からの重訳ではないかという疑念を、詳細な考証を踏まえて払拭している点も注目される。

問題点としては、第一に、前世紀転換期のドイツの精神史的情况を明らかにするためには、本来、例えばイギリスやフランス等の他の地域との比較対照を踏まえないければ、正確な特定は成し得ないはずであるが、そうした基礎作業において十分な配慮が欠けている点が挙げられよう。第二に、近代日本の宗教思潮に関しては、ハースを論じる中で主として多田鼎について言及されるのみで、ドイツとの対照の中でその全体像を浮かび上がらせるには至っていない点も挙げられる。第三に、本論の構成における全体のバランスを考慮した場合、第1章、第2章が充実した内容を持っているに比して、第3章が簡略に過ぎるという点も気になるところである。

こうした問題点はあるものの、従来等閑に付されていたベックとハースの思想と活動を掘り起こし、彼らの精神史的位置付けを明確にした点は十分評価される。また、仏教理解という営為をその時代社会が生み出す表現行動と見、その視点から各人の思想の意義に

光を当てるといふ序論で述べられた本論の趣旨は、各章を通じて一貫して展開されており、全体としての論旨は明解である。したがって、上述の問題点を考慮に入れても、本論文の持つ独自の意義が損なわれるわけではない。

以上により、本論文を課程博士論文に値するものと判定し、「合格」とする。